今週のみことば

「モーセと預言者の言うことを聞きなさい」

（アモス書６章１節～７節）

「それゆえ、今、彼らは最初の捕囚の民として引いて行かれる。大の字になった者どもの、弔いの酒宴は除かれる。」(6:7)

（ルカの福音書１６章１９節～３１節）

「しかし、アブラハムは言った。『彼らにはモーセと預言者がいる。その言うことを聞くがよい。』」(16:29)

今日のメッセージ要旨

◎私たちは「死んだらおしまいで、その後どうなるか分からない」と言う言葉をよく聞きます。イエス様はここで語っておられるたとえに耳を傾けましょう。

◎アモス書６章の主題は「さばきの理由」です。アモスの攻撃は、イスラエルとユダの両方にいる、怠慢でぜいたくな暮らしをする人々に向けられた。東や西、北にある大きな町々も、高慢さの故に滅ぼされた。彼らに起こったことは、イスラエルにも起こる。イスラエルの罪も彼らの罪と同じように大きいからです。

イスラエルの民が國の滅亡に気づかずにいる、彼らの様子が描かれております。サマリヤの山は北イスラエルの天然の要塞都市で、これに北イスラエルは信頼していたのです。北イスラエルの政治的指導者たちのことです。北イスラエルと南ユダは、近隣諸国に比べ、非常に優れた大きい国であった。それは神さまの恵みによるものであったが、彼らはその恵みを忘れて、これらの国々よりはるかに悪い者となった。支配階級の人々は、ぜいたくな家具を使い、最上のものを食べていた。一般の人々の常食は穀物類で、肉類は特別な場合に限られたのです。ダビデは礼拝の時に様々な楽器を用いた（Ⅰ歴代誌15:16)。ところが、貴族たちは酒宴のために用いる楽器を作ることに夢中になったのです。滅亡の前兆そのものです。

◎ルカの福音書16章のイエス様のたとえは二つに分類されます。①財の乱費による終末が訪れる、不正な管理人のたとえ(1-13)、②金持ちとラザロのたとえ(19-31)。人間的評価と永遠の評価の見事な逆転劇を絵画的に描き出している。

ここで教えられることは、①死後も意識が継続する、②地獄の責苦が実在する、③死後に救いの機会が無い、④死者と生者の交流は不可能である。「ハデス」(23)と「アブラハムのふところ」である天国(22)との、大きな隔たりを表わしている。

パリサイ人は富を義人の証拠であると見なしていた。イエス様は物乞いが報いられ、金持ちが罰せられるこの話で、彼らを驚かせた。金持ちは裕福だったからではなく、利己的であったからよみに落ちた。彼はラザロに食べ物を与えず、受け入れす、世話をしなかった。金持ちは、大いに祝福されていたにもかかわらず、冷酷だった。金銭をどれだけ持っているかは、金銭をどの様に使うかに比べれば重要ではないのです。　金持ちは、自分の５人の兄弟は、死から生き返った使者を必ず信じるだろうと思った。しかし、絶えず貧しい人の世話をするように語ったモーセと預言者を信じないのなら、誰かが復活しても彼らは信じないと、イエス様は言われたのです。私たちは福音を聞かないで亡くなった方々のため、神さまの御手に委ね、信頼して祈っていきましょう。

「ですから、すべての汚れやあふれる悪を捨て去り、心に植えつけられたみことばを素直に受け入れなさい。みことばは、あなたがたのたましいを救うことができます。」(ヤコブ1:21)、「ですから、信仰は聞くことから始まります。聞くことは、キリストについてのことばを通して実現するのです。」(ローマ10:17)。

◎大きな富と居心地良い生活は、人々に安心をもたらすかも知れない。しかし、もし私たちが他の人々の必要を無視するなら、神さまは喜ばれない。神さまは、神さまが私たちのことを気にかけてくださるように、私たちが他の人々のことを気にかけることを願っておられる。神さまの国は自己中心も、他人への無関心もない。私たちは人々の必要を、自分自身の欲求よりも優先させることを学ぶ必要があるのです。自分の富を人々の必要のために使うことは、高慢や怠慢から私たちを守ってくれるのです。み言葉に聞き続け、主のみ心を求めて歩みましょう。